

白山信仰

白山

白山は、岐阜県、福井県、石川県、富山県の4県にまたがる山で、富士山、立山とともに日本三名山といわれることがあります。白山は主峰を持たない山で、御前峰(2,702メートル)、大汝峰(2,684メートル)、剣ヶ峰(2,677メートル)の3つの峰からなります。ここに別山も含めて、ひろく白山と総称することもあります。古来は「しらやま」と呼ばれていたようです。

白山には貴重な植物が多く、「ハクサンコザクラ」「ハクサンイチゲ」など白山の名前を冠する植物も18種類あります。昭和37年(1962)に白山国立公園に指定されたのに続き、森林生態系保護地域、カモシカ保護地域にも指定されています。国際的にもユネスコの生物圏保存地域に指定されるなど、国際的にも高い評価がされているといえます。

白山信仰のはじまり

一年中雪を頂き、長良川(岐阜県)、九頭竜川(福井県)、手取川(石川県)、庄川(富山県)の水源となる白山は、古来から人びとの崇拜の対象であったと考えられます。

白山信仰は、御前峰には伊弉冉尊(別称・白山妙理大菩薩。本地仏は十一面観音で白山妙理大権現ともいう。)、大汝峰には天己貴尊(本地仏は阿弥陀如来)、別山には小白山別山大神(本地仏は聖観音)がましますとされる、白山三所権現の考え方を基礎とし、神仏習合の山岳信仰として発展しました。養老元年(717)に、越の国(現在の福井市)の僧・泰澄が白山を開いたことにはじまるとされています。

※ 本地仏 神は、仏や菩薩が人間を救うために仮の姿で現れたものという考え方にに基づき、本来の姿である仏や菩薩のことを本地仏といいます。

馬場と禅定道

白山信仰が確立していく中で、天長9年(832)には、馬場と禅定道が整えられたとされます。

馬場とは、白山を遥拝する場所のことで、この馬場から白山への登拝路のことを禅定道といいます。美濃の白山本地中宮長滝寺(現・長滝白山神社/長瀧寺、郡上市白鳥町長滝)、越前の白山中宮平泉寺(現・平泉寺白山神社、福井県勝山市)、加賀の白山本宮白山寺(現・白山比咩神社、石川県白山市)の3つの馬場と、この馬場からそれぞれに白山へ登拝する禅定道(美濃禅定道、越前禅定道、加賀禅定道)がありました。

白山信仰の歴史

白山を開いたとされる僧・泰澄が、聖武天皇の病気を平癒したり、伝染病の流行を治めたりしたことで、白山もひろく諸国からの崇敬を集めたと伝えられます。

平安時代初期から、天台・真言宗の力が増すとともに、天長5年(828)に長滝寺がいはやく天台宗比叡山延暦寺の末寺となったことに続き、ほかの馬場が置かれた平泉寺、白山寺も延暦寺の末寺となっていきます。

平安時代中期以降は、山岳修験道の母胎として、諸国から多くの信者が白山へ登拝するとともに、時の権力者たちも信仰を寄せ、白山信仰は隆盛期を迎えます。

鎌倉・室町時代を境に、諸国の政情不安により徐々に白山神の威光は最盛期の力を失ってゆくものの、江戸時代には藩主から寄進を受けるなど、人びとの信仰を集めていました。

しかし、明治元年(1868)に明治政府が出した「神仏判然令」は神仏分離を命じたもので、神仏混淆の白山信仰は大きな影響を受けました。
